本所區押上町
富士瓦斯紡績株式會社押上工場

此最後の通告は二十五日各職工の手に渡れり。紡績勞働組合としては、最後の希望として、せめて二十六日に其大多數が復業を申出でざらんことを希へり。二十五日、勞働組合同盟會の應援にて示威運動を開催することとなり、午後三時龜戸長樂館に於ける演說會を閉ぢたる時、鈴木會長松岡野村の各友愛會幹部も來り加はれり。同盟會の人々には杉原交通勞働組合理事長代理を初め幹部會員合計二百人を超へたる多數應援の爲參加し信友會の如き武裝的服裝にて參加したり。應援者を先頭に龜戸長樂館を出でたる時罷業者が居所の羊の如く吐息しつゝ其後に從ひし姿を見て罷業は既に終結に近づけるを思はしめたり。示威行列は警官隊の警戒を突破して革命の歌を高唱しつゝ會社の寄宿舍窓下に到れり。會社は警官に警衛され瓦壁高く聳へて寄宿舍の窓の數個が漸く道路より見ゆるに過ぎざりき。女工の此示威行列を見て感激と昂奮に物も得言はず、潛然として泣ける見ゆ。「女工は泣いて居る」との一語示威行列者の肺腑を抉りて會長初め皆涙あり、帽を振り咽喉をからして勞働歌を高唱し友愛會萬歲を絶叫し氣勢漸く恢復せるを思はしめたり。何ぞ知らん、意氣昂れる行列者の大部分は應援者にて、罷業者は遠く手を束ねて悄然たりしならんとは。

此日復業を申込めるもの男工十四人、女工二十三人なりき。

當夜午後九時勞働組合同盟會各幹部は佐々山工場長に辭職勸告をなすべく工場を訪問したるも守衛は之を拒みて入れず、押問答の末筆談にて其意を通じたるに佐々山氏は他の制肘を受けざる旨を答へたり。

## 十九　罷業慘敗に終る

最後の二十六日は來れり。職工は午前三時頃より續々として復業を申込み、午前七時長樂館に總會を催せり。幹部會先づ復職如何を無記名投票に問へるに四十五名中罷業繼續說二十五名のみ、更に之を祕して一般會員に計れるに三百の出席者中罷業繼續說僅に二十名、幹部非幹部を合して四十五名の硬派ありしに過ぎず。硬派軟派今は仇敵の如く、拳舞ひ蒲團飛びぬ。かゝる折柄棚橋理事來れり。次で廐生氏も來れり。兩氏は玆に無視されき。棚橋氏は袂別の辭を殘して長樂館を引き上げたり。慘敗の跡や醜くも組合資金の分配問題まで起りしを如何せん。罷業團軟派は中野千里外七名を代表として復業を會社に通告したるに、工場は箇々に申込むべしと答へぬ。即ち工場は既に黑票を作製し硬派の復業申込みに對しては「追つて沙汰すべし」と出勤日を知らしめず。

當日午後三時組合事務所に催されたる硬派の會は出席者五十名に上りしが其半は會社に復業を申込みて追つて通告を申渡されたる人々なりき。此會合は何事をも決せず二十八日午後三時協議すべしと